



解剖学者、アイヌの人骨研究などの人類学者の六十年間に及ぶ日記を
明治篇二巻、大正篇、昭和篇の全四巻として完全活字化。森鷗外の妹
喜美子を妻とし、孫には作家星新一という特異稀なる家族の歴史、
東京大学や日本全国の医学界や解剖学、人類学等の学会、学士院の
実態、御前講演など近代史の史料としても貴重である。

小金井良精日記

全四巻 1883~1942

クレス出版

刊行にあたって

本書は、小金井良精（一八五八〜一九四四）の六十年間に及ぶ日記（一八八三〜一九四二）を明治篇二巻、大正篇、昭和篇の全四巻として刊行するものである。

小金井は、安政五年越後国古志郡長岡（現新潟県長岡市）の今朝白で生れ、東大医学部の前身に入学、ドイツに留学して帰国後に解剖学の草創期を築き、アイヌの人骨研究などの人類学、考古学にも大変熱心であった。一般社団法人日本解剖学会会頭を数期務めている。

家族を簡単に紹介すると、初めの妻小松八千代が結婚後一年弱で病死、二年後に森鷗外の妹喜美子（一八七〇〜一九五六、随筆家・歌人）と再婚する。長男良一（一八九〇生）は海軍々医少将、昭和大学教授、妻素子は哲学者桑木巖翼の娘。次男三二（一八九九生）は生化学者、癌研究所勤務の後、昭和大学教授、元日本癌学会会長。長女田鶴（一八九三生）の夫は、東京大学医学部の生化学教授柿内三郎、現在公益社団法人日本生化学会にその名を冠した賞がある。次女精（一八九六生）の夫は星製菓社長、衆議院議員（戦後は参議院議員）の星一、その長男が作家星新一である。

星新一は小金井の日記を素材として、『祖父・小金井良精の記』（一九七四年二月、河出書房新社刊）を上梓し、その冒頭に次のように書いていた、

小学生のころ、こんなことがあった。学校で各人に紙がくばられ、家族のなかでだれが最も好きかを記入せよというのだった。私はそれに（おじいさん）と書いた。祖父のことである。

父や母と書かずに、祖父と書いたことにより、特別な尊敬する人物であることが窺える。

この日記の大部分は小金井のその日の行動や訪問者、郵便の授受などを簡潔に記録したもので、主観的な記述は少なく、子どもや孫の様子についても「面白し」などの一言で終わることが多い。しかし、その淡々とした記述が累積されることによって、小金井の人となり、研究者として一貫した姿勢が明らかとなる。特に、特異稀な家族の歴史の輪郭がしだいに浮かび上がってくる。そして、その背後には東京大学や日本全国の医学界や解剖学、人類学等の学会、学士院の実態、さらには御前講演の場面など、断片的ではあるが、近代史の史料としてユニークで見逃せない証言が散見される。また、小金井の几帳面な性格を反映した旅行時の出費の記述や年賀に訪れた人数と年賀の封書やはがきの明細などは、社会史の史料としても興味深いものがある。本日記が小金井の伝記資料にとどまらず、幅広い分野の近代史の史料として活用されることを願うゆえんである。

なお、小金井良精の日記は、縦二〇〜一六〇ミリ、横八〇〜一〇〇ミリほどの手帳にペンで記されている。基本的に縦書きだが、昭和十六、十七年は横書きである。通常年一冊だが、海外渡航がある時などは二、三冊の場合もある。また、手帳は年末に銀座伊東屋で購入していることが時々日記に記されている。星新一氏の前掲書によって明治十三年からの日記が存在したことが確認できるが、十三年から十五年のものは現在所在不明で、残念ながら翻刻することができなかった。

また、本来なら「明治篇」から刊行するのが穏当であるが、この時期に小金井は長期間の留学に加え、二度海外へ渡航しており、時には日記本文をドイツ語で書くなど、その間は欧文が頻出する。しかも、欧文の量が多いばかりではなく、不鮮明な箇所やメモ風に綴りを省略した箇所も少なからずあり、判読・翻訳には多くの時間を要し、現在も作業を継続している。そのため、まず「大正篇」、「昭和篇」の刊行を先行させたことを「了承いただきたい。なお、「明治篇」には解説、人物の簡単な説明を付する予定である。

編集方針

- 一、原本は、基本的に漢字（旧）とカタカナで記されている（一部外来語などはひらがな）が、漢字は現行通用の字体（新）とし、カタカナはひらがなに（外来語などはカタカナ）翻刻した。
- 一、原本には句読点があるが、句点はごくわずかなので、適宜読み易いように句点の代わりに一字空きとした。また、一日の末尾に一部読点があるが、すべて削除し、統一した。原本の改行は、いちじるしく長文になる場合を除き、一字空きで続けた。ただし、改行して「社会の動き」などを記述している場合は原文どおりとした。
- 一、原本の誤字や脱字などは、適宜訂正し（「除々」→「徐々」、「吊詞」→「弔詞」など）、疑問が残るものは「ママ」とした。また、同一の語の表記が異なる場合は、一般的なものに統一した場合（「ころ」は「比」と「頃」を混用しているが、後者に統一）がある。
- 一、人名などの固有名詞の誤りは、可能なかぎり確認し、訂正した。ただし、孫の星親一（本名）を「新（一）」とするなど、近親者の人名表記は、資料的な意義を考慮し、「ママ」を付して原本どおりとした。
- 一、欧文の箇所は、文献、論文、演説（演舌）などは原文のままとし、人名や地名などは、原則として近代の慣用に従い、カタカナで表記した。小金井によるカナ表記（発音よりも綴りを重視する傾向がある）もある程度考慮したが、一部表記が異なる場合がある。また、その他の語や短文は、翻訳するかカタカナで表記（必要に応じ「*」内に翻訳を付す）し、いずれも細ゴチック体で示した。

● 組見本：「鷗外の最期と葬儀の状況を伝える」

既に先に来り居る 賀古氏と病室に入る、年号起原調査
 のことに付「再びこれにかかる様になれば云々」言へり
 これ最後の言なりき 秋田へ電報を發す 夕刻は早精神
 明瞭を欠く
 七月八日 土 曇少雨
 朝剪髪、早々千駄木、見客客にて玄関の方騒がしく病室
 に近きを以て今朝より受付を別宅とす 朝富喜子着、危
 険状態にて日暮る
 七月九日 日 雨
 七月十二日 水 晴

これを預りたるに付団子坂下銀行に小切手として入れん
 としたれども叶はず、祭資下賜に付九時官省に到りこれ
 を拝受けし御礼署名をして十一時帰る 代人として勅使の
 御受けするため急ぎ更衣（初めて敷一等を佩用す）二時
 勅使着、二三分に済む 後閑院宮殿下 御代弔あり
 又十五宮殿下より御使あり、午後東宮殿下より料理五〇
 人前下賜 文士等徹夜、きみ通夜す、自分は十二時独帰
 る
 式当日、八時千駄木、十二時半出棺、谷中斎場にて二時
 式を始め、予定の通り、会葬者一三〇〇計とか、町屋火
 葬場、四時半千駄木へ帰る、尚人々多し、晩食、会計掛
 り秋山、両角両氏より引渡しあり一八円不足とかにて計
 算なかなか長くなる十時半帰宅
 七月十三日 木 晴
 前八時千駄木、諸子と自動車二台にて出かける九時半拾
 骨、これより類、荒木、きみ、せい、自分向島弘福寺に
 到り堂に安置し墓地を見たりなどして一時千駄木へ帰る
 尚ほ雑務多し五時頃家に帰る
 七月十四日 金 晴



明治 13 (1880) 年 7 月 東京大学医学部卒業 前列左三人目 小金井良精、その後ろはベルツ博士

小金井良精先生略譜（一八五八〜一九四四）

- 一八五八（安政 5 年） 十二月十四日（新暦の一月十五日）越後国長岡今朝白町に生る。
- 一八七〇（明治 3 年） 13 歳、大学南校に入学。在学一年半。
- 一八七二（同 5 年） 15 歳、五月第一大学区医学部入学。
- 一八八〇（同 13 年） 23 歳、五月東京大学医学部雇医員。七月医学全科卒業医学士となる。十月解剖学及び組織学修業のため満三カ年ドイツ国に留学。Reichert Rabi, Waldeyer 先生等に就き、特に Waldeyer 先生からはベルリン大学において助教を命ぜられる。
- 一八八五（同 18 年） 28 歳、六月二十日帰朝、九月十一日から Dizee の後をうけて系統解剖学の講義を開始。
- 一八八六（同 19 年） 29 歳、三月医科大学教授。
- 一八八八（同 21 年） 31 歳、五月森林太郎妹喜美子を娶る。六月医学博士の学位を受く。
- 一八九三（同 26 年） 36 歳、九月補医科大学長。解剖学第二講座を担任。
- 一八九六（同 29 年） 39 歳、九月依願免医科大学長。
- 一九〇〇（同 33 年） 43 歳、フランス巴里における万国医学会開設につき委員として参列を命ぜられ六月二日出発。独、英、米をめぐって翌三十四年三月十一日帰朝。
- 一九〇四（同 37 年） 47 歳、四月解剖学第一講座分担任。
- 一九〇六（同 39 年） 49 歳、七月解剖学第一講座担任。
- 一九一〇（同 43 年） 53 歳、三月ベルリン大学百年祭に招待あり、七月六日出発、式典参列に先立ち英、仏歴訪。巴里では万国博覧会開会式に列席、名誉会頭に推される。百年祭では東京大学を代表して祝辞を呈す。十二月二十九日帰朝。
- 一九二〇（大正 9 年） 63 歳、十一月学術研究会議会員。
- 一九二一（同 10 年） 64 歳、十二月にこの時初めて設けられた定年制の申合せに従い、依願免本官。
- 一九二二（同 11 年） 65 歳、二月名誉教授となり、医学部講師嘱託となる。
- 一九二四（同 13 年） 67 歳、十月に講師嘱託を解かる。
- 一九二七（昭和 2 年） 70 歳、六月二十日「本邦先住民族の研究」について御前講演。
- 一九三六（同 11 年） 79 歳、四月二日東京人類学会・日本民族学会第一回聯合大会第二日に「日本民族中の南方要素の問題について」を講演。これが先生最後の学術講演となる。
- 一九四四（同 19 年） 87 歳、十月十六日午後六時半薨去。高輪泉岳寺に葬る。

（「日本医事新報」昭和 33 年 12 月 6 日「小金井良精先生を偲ぶ」より）



小金井良精と妻喜美子（昭和 10 年撮影）

